

「推敲」指導における工夫と実践

— インベンションとの関連に焦点を当てて —

埼玉大学大学院教育学研究科

渡辺浩史

1. 「推敲」指導は「書くに値する内容」を発見させる

作文教育の中で、推敲は重要なものとされている。しかし、作文指導の時間の中で推敲指導は、指導者が教え込もうとする添削指導と化していることが多い。その結果、例えば学習者が自分で考えたという意識を持つことができずに、何か借り物のような文章になってしまい、達成感が得られないことがある。これは、外的規準を設ける添削指導的発想の学習展開が原因であると言えよう。学習者が達成感が得られるために、推敲を文章の個性化のための作業として、内的規準を想定する立場からの指導、すなわち新たな「推敲」指導を進めることが要請されているのである。学習者の内部に持つ「書くべきこと」を掘り起こす大きな手立てとして、この「推敲」指導はもっと重視されるべきであると考えます。

2. 「推敲」指導を成立させる指導者のあり方

前回の発表では、意見文「推敲」の指導に限定し、その指導上の課題、すなわち克服すべきポイントを3点挙げた。(1) 自らの考えといっても、学習者が初めから自分の意見をしっかりと持っているわけではない。授業のプロセスの中で、学習者が自らの中に発見しつつ形を与えていけるような配慮が必要である。[学習者同士の学び合いなども含む] (2) 学習者にとっての「推敲」の意義(仮に「推敲」観と呼ぶ)がそれぞれに自覚されている必要がある。(3) 指導者自身が、上述のような学習者の目的意識や「推敲」観に注意を払い、同時進行的に理解を深めている必要がある。それがないと指導の手掛かりが失われてしまい、「推敲」指導に関する教育的関係性自体が成立しない。(傍線は発表者自身による)

上記のうち、(1)と(2)は授業実践を重ねることにより、その課題の克服はある程度可能であろう。しかし、(3)はかなり注意しても指導者の意識はなかなか改めることは難しい。指導者が厳格に添削していこうとする態度から、やわらかな姿勢に変わったとしても、やはり学習者を理解しているとは言い難い。つまり、「ここはこう直してごらん」というような指導(結局、添削指導と同様)を重ねても、学習者が自ら「推敲」しようとする力を獲得することはできないのではあるまいか。

3. 「書くべきこと」を掘り起こす指導のあり方

前回の発表で、意見文を書く時に行われる「推敲」は、学習者の目的意識に左右され、個性的な過程となるのではないかと仮定し、この時に指導者がどのように理解し、関わっていけるかについて考察した。今回は、「推敲」指導と同じく、学習者の「書くべきこと」を掘り起こす手だてとして行われている「インベンション指導」との関連に焦点を当て、「推敲」指導における指導過程と比較・検討し、その特徴について考察していきたい。以上の観点から、自らの実践記録(計画も含む)をふり返りつつ分析・考察を進める。